

発表題目 エナクティヴィズムとホワイトヘッドの知覚論

氏名 平田一郎 (HIRATA Ichiro)

所属 関西外国語大学短期大学部

近年の知覚論において、重要な動きの一つにエナクティヴィズム(enactivism)がある。これは元々ヴァレラによる現象学的アプローチにおいて、人間の知覚が脳髄の中の生起ではなくむしろその全体的な身体性を強調しようとして、さらにそこから知覚が単なる受動的なものではなくある種の「行為性」(これを action に対して enaction とする)を認めようとするものであった。そしてこれは現象学を超えて、ノエによって英米的な心の哲学の文脈において論じられることとなったのである。

このような知覚における脳髄を超えた身体の全体性を強調するという点ではホワイトヘッドもまた共通する。さらに彼は知覚がその一例となる人間の経験たる「現実的存在」(actual entity)を「経験の活動」(act of experience)と称する。その点で人間経験の身体的全体性、脳髄の中にはないある種の現象学的在り方の強調といった点でホワイトヘッドの知覚論とエナクティヴィズムは同じ考え方の上に立つと見なせる。

もっとも知覚における能動的な「行為」とはどのようなものであろうか。それについての議論の中で、ノエ自身そういった「行為」が現実的に活動するのではない、としたことは「行為性」を強調する意味自体を失わせるという批判も出てきた。

これに対してホワイトヘッドの枠組みであるなら、そういった「行為性」とは可能態の現実化ということで論じられることになる。そこでは主体が能動的に「行為する」のではなく、むしろ客体からの働きかけによって可能態が活動化(actualize)されるということになる。もっともその場合エナクションとして知覚の行為性を強調したことにどれくらいの意義があるのかという疑問は出るかもしれない。

むしろここで重要なことは、知覚におけるある種の全体性、身体性の強調にあるのではないのか。「心の中の画像」という伝統的なモデルに対して、エナクションという身体全体の活動が知覚を成立させるということがポイントであるかに思われる。

もっともこういったエナクティヴィズムの活動性は、さらに心における活動において内容を認めない急進的エナクティヴィズム(radical enactivism)といった展開に至った。これについては、ホワイトヘッドの立場からはエナクティヴな知覚が表象による知覚と対比的な「因果的効果」(causal efficacy)による知覚であるという点から論じうる。

ともあれこの発表では、以上のようにホワイトヘッドの知覚論がエナクティヴィズムなど現代的議論に対して持つ意味を論じていきたい。